

文脈から見た「が」と「は」

永井麻生子*

キーワード: 「が」、「は」、先行文脈、叙述内容、結束性

要旨

本稿では日本語の動詞述語文で動作主をマークする「が」と「は」の使い分けには、当該文の叙述内容と先行文脈との関係が関与すると言うことを述べる。たとえば次の2組の連文を比べた場合、(1)bでは「は」が、(2)bでは「が」が使用されている。

(1) a 柄の悪い男が電車に乗ってきた。 b 子ども連れの母親はさりげなく車両を移った。

(2) a 柄の悪い男が電車に乗ってきた。 b 子ども連れの母親が居眠りをしている。

(1)(2)から、先行文脈と関連のある叙述内容の場合は「は」で動作主をマークし、関連の薄い叙述内容の場合は動作主を「が」でマークすると考えられる。

従来の研究では、動作主が新情報か旧情報かということに焦点が当てられてきたが、動作主以外の要素に関しても、「は」使用文には先行文との関連を表す要素が、「が」使用文には関連を表さない要素が、現れる傾向がある。文の3成分(補足語、連用修飾要素、述語)について観察した結果、次のような傾向が見られた。

「は」使用文には、ソ系列の指示詞(文脈指示)、代名詞、先行文を対象・基準にとる連用修飾要素、先行文を対象・相手とする述語が現れやすく、「が」使用文には先行文との関係を表さない要素が現れやすい。

はじめに

本稿では、動詞述語文の動作主をマークする助詞「が」と「は」の使い分けについて、Iにあげた現象の考察を試みたい。

I 動詞文の動作主をマークする「が」と「は」の使い分けには次のような傾向がある。

が……先行文脈との関連が表示されていない叙述内容の文で使用されやすい

(1) a 柄の悪い男が電車に乗ってきた。 b 子ども連れの母親が居眠りをしている。

は……先行文脈との関連が表示されている叙述内容の文で使用されやすい

* NAGAI Aiko: 神戸市外国語大学大学院外国語学研究科文化交流専攻大学院生。

- (2) a 柄の悪い男が電車に乗ってきた。 b 子ども連れの母親はさりげなく車両を移った。

以下、上記 I の事実について考察した上で、動作主を「は」でマークする動詞述語文と「が」でマークする動詞述語文、それぞれに現れやすい要素について観察する。なお、本稿では考察の対象を、ある事象を描写する動詞述語文に絞り、小説文等の「が」と「は」の使い分けに関する解明を目的とする。

1. 問題の所在

1-1. 先行研究

「が」と「は」の使い分けについては従来より多くの研究がなされてきた。その多くは久野(1973)に代表される、「が」あるいは「は」に先行する名詞句に注目したものである。それに対し近年では柴谷(1989)、野田(1996)、庵(1997)等に見られるように、1文全体に注目した研究もなされている。本稿は、後者の研究をふまえた上で、文の各成分に現れる要素を詳細に観察することを目的とするものである。

本節では1文全体の叙述内容に着目した研究の詳細をふりかえる。柴谷(1989)は「が」と「は」を文法機能、テキスト機能の2つの機能に分けて考えている。「は」の文法機能を「ものを引き分けてそれに対する経験的判断を下す」、「が」の文法機能を「主語を示す」とした上で、その文法機能から「は」は「強力な結束性を示す」テキスト的役割を果たすとしている。また野田(1996)では主題を持つ文(本稿でいう「は」使用文)の談話での機能を「話題を継続する」、主題を持たない文(同「が」使用文)の談話での機能を「話題を設定したり、転換する」としている。

このように、「は」が先行文脈を受ける機能を持つ、という点では先行研究の見解も一致しており、また、本稿でも同様の立場をとる。しかし、「が」のテキスト的機能に関してはまだ、考察が必要かと思われる、以下、1-2. で実例をもとに、「が」と「は」の使い分けには、当該文の叙述内容をテキストの中でどう位置づけるかが大きく関わっていることを確認したい。

1-2. 考察の対象

(1) は「が」あるいは「は」の先行名詞句に着目するだけでは、その使い分けについて説明不能な例である。

- (1) a 一瞬、徹也と投手は、互いの目を見つめあっていた。 b ボールを受け取った投手が、ランナーに目をやった。 c 徹也はバッターボックスをはずして、手に砂をつけた。(いちご)

「投手」も「徹也」も旧情報であるのだが、それらに後続する助詞は「が」と「は」で、異な

っている。(2)では旧情報に「が」が、(3)では新情報に「は」が後接している。

(2) a で、本そういちは仕事柄、拡大コピーも何でもできます、っていうコピー機を持っているので借りに行ったわけです。

b ところが、八〇〇字の半分の部分を四〇〇字の大きさにしたいわけだから、つまり二倍に拡大すればいいわけなんだが、これがなぜかうまくいかない。c 大きさとしては二倍になって出てくるんだけど、複写したい場所が間違っってへんな部分が二倍になって出てくる。d 何枚か失敗したあげく本そういちが「ねえ、アタマ使おうよッ」と叫んだ。(サギ)

(3) a ある日、次長に呼ばれ、

「封筒詰めするものがたくさんあるから、アルバイトの人と一緒に2,3日それをやってくれ」

と言われたのです。

b それを聞いていた後輩は

「ついに〇〇さんもアルバイト扱いされるようになりましたか……」

と一言ポツリ。

(とつ)

(1)から(3)の例からも明らかなように、「が」あるいは「は」に先行する名詞句の、情報としての新旧からだけでは、「が」と「は」の使い分けは説明不能である。では、当該文の叙述内容から「が」と「は」の使い分けについて観察した場合、どのような問題があるのだろうか。

1-1. で述べたように「は」が先行文脈の内容を引き継ぐ形で使われやすいことについては、先行研究でも概ね意見の一致を見ているが、「が」の扱いについてはやや差が見られる。柴谷(1987)では「が」の文の機能として「把握された事象をそのまま呈示する」としている。野田(1996)の「話題を設定したり転換する」機能は、柴谷(1987)で述べられた機能の派生的な機能であると思われる。なぜなら、次のような文章も成立可能だからである。

(4) a 女の車のブレーキランプが赤々と点灯した。 b 次いで、左のウインカーが点滅した。 c スピードが落ちた。 d ハンドルが左に切られた。 e 車が路肩に寄せられた。(誤解)

このように「が」使用文の基本的機能は「現象を文章表現の場に導入する」(仁田 1991)ことにあるとおもわれる。次章では、動詞述語文2文からなる連文を用いて、先行文と当該文の関係の表示の有無によって「が」と「は」のうち、どちらが選択されるかが異なるということを検証したい。

2. 先行文脈と「が」と「は」の選択

2-1. 先行文脈との関係の有無

前章で見たように「が」と「は」の選択には「が」「は」の先行名詞句の情報としての新旧だけが関わっているのではない。では、「が」と「は」の選択に関与するのは何であろうか。

(5)(6)をご覧頂きたい。

(5) 公園の風景

- a 茶髪的女子高生が大声でおしゃべりをしている。 b 頑固そうな老人がひなたぼっこをしている。

(6) 公園の風景

- a 茶髪的女子高生が大声でおしゃべりをしている。 b 頑固そうな老人は彼女たちをにらみつけている。

(5)ではbに「が」が使用されているが、この連文では、aとbの文の叙述内容に直接の関連はない。それに対し、(6)ではbに「は」が使用されている。(5)ではaとbの叙述内容がそれぞれ独立的であるのに対し、(6)ではbの叙述内容はaと関連しており、bの文はaの文なくしては成立し得ない。仮に(5)のような連文を「独立型」と呼び、(6)のようなタイプの連文を「先行文依存型」と呼ぶ。次掲の例(7)(8)では、(7)が独立型、(8)が先行文依存型にあたる。

(7) 病院のロビーで

- a 寝間着を着た患者が立て続けにたばこを吹かしている。 b 中年の看護婦が忙しそうに通り過ぎていった。

(8) 病院のロビーで

- a 寝間着を着た患者が立て続けにたばこを吹かしている。 b まだ若い看護婦は見えず振りで通り過ぎていった。

以上のように「独立型」の連文では後続文bで「が」が用いられ、「先行文依存型」では後続文bで「は」が用いられている。ここで(1)を再び考察する。

- (1) a 一瞬、徹也と投手は、互いの目を見つめあっていた。 b ボールを受け取った投手が、ランナーに目をやった。 c 徹也はバッターボックスをはずして、手に砂をつけた。

aとbの関係を見ると、bはaに対し独立的である。時間的経過に従って別個に生じた事柄を述べているに過ぎない。abを1組の連文と見た場合、「独立型」だといえることができる。それに対しcの叙述内容はbの叙述内容が契機、あるいは理由となって成立しているのだから、bcは「先行文依存型」である。このことが同じ旧情報である「徹也」「投手」に後接する助詞が「が」と「は」になる理由である。1-1.で見たように、柴谷(1987)では「は」は結束性を示すと

述べられていたが、先行文脈に依存的な内容の文は当然先行文脈との結束性が強いので、「は」を求めるものと考えられる。

以上のことから2文からなる連文については次のようにいうことができる。

II 連文の先行文と後続文の関係には「独立型」と「先行依存型」の2類型がある。

「独立型」の連文では後続文は「が」使用文である。

「先行文依存型」の連文では後続文は「は」使用文である。

2-2. 「が」「は」が共に使用可能となるための条件

「が」と「は」の使い分けを説明するのが難しいのは「が」「は」が共に使用可能な状況が存在するからである。本節では「が」と「は」が共に使用可能な状況について考察し、その場合、どのような要因で「が」あるいは「は」が選択されるのかを考える。

(9)(10)の連文をご覧きたい。

(9) a 背の高い男が店に入ってきた。 b 店長が急にその場にしゃがみこんだ。

(10) a 背の高い男が店に入ってきた。 b 店長は急にその場にしゃがみこんだ。

(9)(10)は共に連文として自然である。(9)(10)では同一の事態が異なる連文として表現されていることになる。このような現象はなぜ起こるのだろうか。これはa→bという時間的な連続関係にある事柄を別個の事柄として(「独立型」の連文で)表現するか、ab間になんらかの関係があると(「先行文依存型」の連文で)表現するかの違いであると思われる。そのことを検証するために、(9)(10)の差異を明確にしてみる。(9)(10)のbのあとに次の(11)(12)を後続させると、どちらがより自然に感じられるであろうか。

(11) その男とは顔を合わせたくなかったのだ。

(12) 持病の発作が起こったのだ。

(9)には(11)(12)のどちらを後続させても自然に感じられる。

(13) a 背の高い男が店に入ってきた。 b 店長が急にその場にしゃがみこんだ。 c その男とは顔を合わせたくなかったのだ。

(14) a 背の高い男が店に入ってきた。 b 店長が急にその場にしゃがみこんだ。 c 持病の発作が起こったのだ。

ところが、(10)を見ると、(11)が後続した場合は自然だが、(12)が後続した場合、不自然に感じられる。

(15) a 背の高い男が店に入ってきた。 b 店長は急にその場にしゃがみこんだ。 c その男とは顔を合わせたくなかったのだ。

(16) ?a 背の高い男が店に入ってきた。 b 店長は急にその場にしゃがみこんだ。 c 持病の発作が起こったのだ。

これはcによってab間の関係が否定されるため、すわりが悪くなるものと思われる。つまり、(10)では、ab間の関係の有無が分からないため「が」「は」ともに使用可能なのである。このような場合、関係を表示するかどうかは「表現効果」の問題であって、どちらかを強制的に使用するものではない。「が」「は」がともに使用可能な状況は、先行文との関係を示すことも示さないこともできる状況である。先行文脈と関係がある事柄であっても「が」で表示することができるのは(13)(14)などから分かる。つまり、「が」は文脈に対しニュートラルだが、「は」は先行文との関係が表示されている文でのみ使用可能なのである。ところが、同一のテキストに属する文の場合、何らかの結束性が求められる(Halliday & Hasan 1976)。その中で先行文に依存しないことを表す「が」を使用することは、野田(1996)などで指摘されているように、「話題を設定したり、転換する」ことを表示する効果をもたらすものと思われる¹。

上記のように先行文脈の叙述内容の関係の有無のみで「が」と「は」が選択されるわけではなく、「関係の表示」の有無が「が」と「は」の選択に関与するのである。

本節での観察をまとめると、冒頭で示したIの様になることができる。

I (一部再掲)

が……先行文脈との関連を表示しない叙述内容の文で使用されやすい

は……先行文脈との関連を表示する叙述内容の文で使用されやすい

3. 「は」使用文と「が」使用文のそれぞれの傾向

3-1. 本章の目的

前章では「が」と「は」の使い分けの条件の解明を試みた。本章では「は」使用文と「が」使用文にはそれぞれどのような要素が現れやすいのか、また、逆に言えばどのような要素が含まれる文では「が」あるいは「は」の方がすわりがいいのかを観察してみたい。本章で考察する現象は、日本語の上級学習者の作文指導などに有効なものと考えられる。

3-2. Halliday & Hasan (1976) の「結束性」と「が」「は」の使い分け

1. で述べたように、「が」と「は」の選択に関する研究はこれまで「が」あるいは「は」に先行する名詞句を中心に進められてきたが、本稿では、先行文脈との関連が表示されているのが動作主以外の要素であっても、先行文脈との関連が表示されている場合は「は」が使用されやすく、関連が表示されていない場合は「が」が使用されやすいことを述べる。

以下本節では、Halliday & Hasan (1976) で述べられている「結束性」について概観すること

¹ 庵(1997)で述べられているような、「が」の、対立的な事柄を表す機能も同様の理由によるものと思われるが、今後詳しく考察を進める必要がある。

3-3-1. 補 足 語

益岡・田窪(1992)では補足語として「名詞+格助詞」,「名詞+引用の助詞」をあげているが,本稿では「名詞+格助詞」のみを扱う。これは「名詞+引用の助詞」からなる補足語はそれを求める動詞が制限されることなどから,本稿の考察の対象からはずれることによる,益岡・田窪(1992)ではガ・ラ・ニ・カラ・ト・デ・ヘ・マデ・ヨリの9種類の格について考察しているが,本稿の考察内容は格による差はないため,どの格も同様に扱う。

まず,次の2組の連文をご覧頂きたい。

(17) a ウェイトレスがコーヒーの入ったカップをテーブルにおいた。 b 背広を着た男が店に入ってきた。

(18) a ウェイトレスがコーヒーの入ったカップをテーブルにおいた。 b 背広を着た男はカップを熱そうに持ちあげた。

(17) b には,先行文に現れた要素は含まれていないが,(18) b には先行文にある「カップ」が再び現れている。このように先行文中に現れている要素が再び述べられるとき,その文は「は」使用文となる傾向がある。ただし,次のような場合には同じ「コーヒー」という単語が含まれていても「は」使用文は用いられにくい。なぜなら,同じ「コーヒー」でも,指示するものが異なるからである。繰り返しになるが,先行文と当該文の叙述内容に関連がある場合に「は」が用いられやすいため,同じ単語が含まれていても指示するものが異なる場合には「は」が用いられるための条件にはならない。

(19) a ウェイトレスがコーヒー₁の入ったカップを二人連れの席においた。 b どやどやと入ってきたグループがコーヒー₂を注文した。(コーヒー₁≠コーヒー₂)

(18)のように同一のものを指示する要素が現れる場合には「は」が用いられやすい。同一のものを指示するのであれば,代名詞や,文脈指示の指示詞であってもやはり「は」が使用される傾向にある。

次の2組の連文をご覧頂きたい。

(20) 電車の中で

a 高校生の集団が床に座り込んでいる。 b 中年の女の人が隣の人に何か尋ねている。

(21) 電車の中で

a 高校生の集団が床に座り込んでいる。 b 中年の女の人^は眉をひそめて彼らを見ている。

(20) b には先行文との関連を表す要素が存在しない。しかし,(21) b には「彼ら」という代名詞が存在する。代名詞は前方照応的に,先行文脈に依存するので,代名詞の存在する文には「は」使用文が用いられやすい。(22)(23)(24)も,代名詞を含む文が「は」使用文となっている例である。

- (22) a 若い男が息せき切って走ってきた. b 女(は / #³が)彼を無視して突っ立っていた.
- (23) a ピエロの扮装をした男が風船を配っている. b 子供たち(は / #が)喜んで彼から風船をうけとった.
- (24) a 若い男がたばこの煙で輪を作っている. b リボンをつけた女の子(は / ?が)「もっと作って。」と彼にせがんだ.

代名詞以外に、先行文中に現れている要素と同一のものを指示する「指示詞」についても同様の現象が確認できる。

文脈指示の指示詞について益岡・田窪(1992)では次の様にまとめている。

「こ」 直前の話題の中の対象、または、これから話題にしようとする対象を指す。

「そ」 聞き手の言った内容を受けたり、自分の話題に出てきた要素を指したり、仮定の内容の中の要素を指したりするときに使われる。

「あ」 記憶の中の要素を指したり、聞き手と共通に体験した要素を指したりする。

本稿ではある事象を描写する際に使われる連文を考察の対象にしているため、「ア」系列は考察の対象外とする。また、「コ」系列のうち「これから話す話題を先取りする」用法の場合は「は」使用文に現れにくい。これは、次の話題の先取り、という話題設定の機能を持つ文なので、先行文との関連を表さないためである。

それに対し、「ソ」系列が文中に現れる場合は「は」使用文が現れやすくなる。

- (25) a 小さな男の子が急に路地から大通りに飛び出した. b 赤い自動車(は / ?が)それを上手によけた.

「それ」が先行文との関係を表すため、「は」の方が「が」よりも自然に感じらる。先行文との関連を示さない内容の場合(26)のように「が」の方が自然に感じられる。

- (26) a 小さな男の子が急に路地から大通りに飛び出した. b 赤い自動車(が / #は)ゆっくりと走っていった.

本節での観察をまとめると次のようになる。

IV 「は」 使用文に現れやすい補足語:

先行文中に現れた名詞、代名詞、ソ系列の指示詞(文脈指示)

「が」 使用文に現れやすい補足語:

先行文との関連を表さない名詞

³ #は文脈上の不適格を表す。

3-3-2. 連用修飾要素

本節では、「が」使用文と「は」使用文の連用修飾要素に現れやすい要素を観察する。連用修飾要素においても、補足語と同様に「は」使用文には先行文との関係を表す要素が現れやすく、「が」使用文には先行文との関係を表さない要素が現れやすい。

(27) a 突然、電車の扉が閉まった。 b 走ってきた男の人が足を滑らせて転んだ。

(28) a 突然、電車の扉が閉まった。 b 走ってきた男の人はあと一步のところで乗り損ねた。

(27) b には先行文との関連を表す要素はない。それに対し(28) b では「あと一步のところ」という連用修飾要素によって、「電車の扉が閉まった」ことを基準にした記述がなされていることを表している。このように、「は」使用文の連用修飾要素には先行文の事態を基準にした記述がなされやすい。それに対し、「が」使用文の連用修飾要素には「突然」などのように先行文と当該文の叙述内容の関係を断ち切るような要素が現れやすい。次の(29)でも、連用修飾要素に先行文との関係が現れているため、「は」が使用されている。

(29) a 山田君が1.8 m 飛んだ。 b 鈴木君はもっと高く飛んだ。

(29) b では、山田君の飛んだ高さを基準にして「もっと高く」と記述している。このように連用修飾要素中の動詞・形容詞などが求める基準が先行文中に表されていたり、先行文の叙述内容全体である場合、「は」が用いられやすい。

また、先行文中の要素、あるいは先行文の叙述内容全体が当該文の連用修飾要素中の形容詞や動詞、副詞等の対象となっている場合も「は」使用文が用いられやすい。

(30) a 中年の男性がたばこをふかし始めた。 b 座っていた女の人が急に立ち上がった。

(31) a 中年の男性がたばこをふかし始めた。 b 子供連れの女性は顔を背けて立ち上がった。

(30) b の「急に」などは先行文との関連を表さない。それに対して(31) b の「顔を背けて」は必ず対象を必要とする表現であり、(31) の場合、その対象は「(たばこをふかし始めた)男性」であると解釈される。このように連用修飾要素中の動詞が先行文にその対象などを求める場合、「は」使用文が用いられる。(32)(33)は、それぞれ(32)が、先行文との関連を表さない形容詞を、(33)が先行文との関連を表す形容詞を含んだ連用修飾要素を持つ例である。

(32) a 中年の紳士がパーティー会場に入ってきた。 b おしゃべりをしていた人たちがけたたましく笑った。

(33) a 中年の紳士がパーティー会場に入ってきた。 b おしゃべりをしていた人たちは懐かしそうに目を細めた。

(33) b は「懐かしそうに」という連用修飾要素のもとになる「懐かしい」という感情が対象を必要とする。その対象が「中年の紳士」であると解されるため、先行文との関係が表示され、「は」

が用いられるものである。

「そのまま」などの副詞も「は」使用文に現れやすい。

(34) a 看板が倒れている。 b 歩いていた男の人が突然きびすを返してってしまった。

(35) a 看板が倒れている。 b 歩いていた男の人はそのまま跨いでいった。

(35) b の「そのまま」により a の「看板が倒れて通り道をふさいでいる状態」が b でも継続していることを表している。それに対し (34) b では a との関係を表示することなく、新しい事態が生起しているため、「が」使用文になっているのである。

本節で見てきたように、「は」使用文の連用修飾要素は先行文との関連を示すものであるのに対し、「が」使用文に現れやすい連用修飾要素は先行文との関連を顧慮していないものである。先行文との関連を示すもので代表的なものは「先行文中の要素、あるいは先行文の叙述内容全体が当該文の連用修飾要素の基準・対象となっているもの」である。典型的とはいえないが次の例は 3-3-4. の「叙述内容全体が先行文との関係を示すもの」に近く、非明示的な形で先行文との関係を表示する連用修飾要素である。

(36) a 若い女がたばこを吸い始めた。 b 中年の紳士が突然立ち上がった。

(37) a 若い女がたばこを吸い始めた。 b 中年の紳士はわざとせき込んだ。

(37) b の「わざと」は直接的に対象を求める要素ではない。しかし、この「わざと」は先行文との関連を示している ((38) 参照)。

(38) a [若い女がたばこを吸い始める]

↓
中年の紳士は [若い女がたばこを吸い始める] のが嫌だと思った。

↓
中年の紳士は [若い女がたばこを吸い始める] のを やめさせるために せき込んだ。

→ わざと

このように直接的に表示しなくても原因・理由など、先行文との結束が表示されている文の場合、「は」使用文が用いられやすい。

本節で扱った「連用修飾要素」に関する現象をまとめると V となる。

V 「は」使用文に現れやすい連用修飾要素:

先行文中の要素や先行文の叙述内容が基準・対象となるもの

先行文と当該文の叙述内容の関係を表示するもの

「が」使用文に現れやすい連用修飾要素:

先行文との関連を表さないもの

3-3-3. 述 語

野田 (1996: 88-89) では「富士山が見えるよ」構文⁴の述語に使われやすいものを、次のようにあげている。本稿で扱ってきた「が」使用文に現れやすい述語にも同様の傾向がみられる。

- (39) ● 知覚を表す「見える」「聞こえる」
 ● 存在を表す「ある」「残っている」
 ● 出現を表す「来る」「出てくる」
 ● できごとの発生を表す「起きる」「始まる」「死ぬ」
 ● 一時的な状態を表す「光っている」「はやっている」
 ● もっとも典型的には「～を」などをともなわず「が」だけをともなうもの、つまり自動詞や他動詞の受動形

それに対し、「は」使用文に現れやすい述語には 3-3-1. から 3-3-2. で見てきたのと同様の傾向が見られる。つまり、述語に関しても、先行文と関連していることを表すものが、「は」使用文には現れやすいといえることができる。

- (40) a 小さな子供が砂遊びをしている。 b 初老の女性が気持ちよさそうに居眠りしている。

- (41) a 小さな子供が砂遊びをしている。 b 初老の女性は「何してるの?」と話しかけた。

(41) b の「話しかける」など、対象を必要とする述語の必須格が当該文中に存在せず、先行文中に存在するような場合、「は」が用いられやすい⁵。それに対して (40) b のように「居眠りしている」など先行文との関係を表さない要素の場合は「が」が用いられやすい。以下、同様の例である。

- (42) a サラリーマン風の男が携帯電話でなにやら話している。 b 中年の女性が熱心に何かを読んでいる。

- (43) a サラリーマン風の男が携帯電話でなにやら話している。 b 中年の女性は「みんなに迷惑ですよ。」と注意した。

(43) のように当該文の動詞がその対象となる事態を直接的に先行文に求めるものは「は」使用文となりやすい。また、直接的に先行文にその相手・対象などが現れていなくても、(45) b 「移る」のように先行文の存在に依存する動詞もある。

- (44) 駅のホームで

⁴ 野田 (1996) では「主題を持たない文」を「富士山が見えるよ」構文と、「君が主役だ」構文の 2 つに分類している。本稿で扱う、動作主を「が」でマークする動詞述語文は「富士山が見えるよ」構文に相当する。

⁵ 当該文では省略されている要素が先行文中に存在している述語が先行文との関連を表している例も「述語が先行文との関連を表す」ものとして扱ったが、「補足語が先行文との関連を表す」ものとも考えられる。

- a 初老の男がはげしく貧乏揺すりをしている。 b 子供連れの女が眠っている子供の頭をなでている。

(45) 駅のホームで

- a 初老の男がはげしく貧乏揺すりをしている。 b 子供連れの女は違うベンチへ移った。

(45) b では「移った」という動詞で「もとの場所(=初老の男が貧乏揺すりをしている場所)」と結びついている。このように直接的に先行文と結びつかなくても先行文に対する依存関係を表す述語の場合も「は」が用いられやすい。

本節での観察をまとめると VI の様になる。

VI 「は」 使用文に現れやすい述語:

先行文中の要素や先行文の叙述内容が基準・対象となるもの
先行文と当該文の叙述内容の関係を表示するもの

「が」 使用文に現れやすい述語:

先行文との関連を表さないもの

3-3-4. 叙述内容全体

以上 3-3-1. から 3-3-3. までは文を 3 成分に分けそれぞれの成分に現れる要素の傾向を見た。本節では 3-3-1. から 3-3-3. のように明示的に先行文との結束を表す要素を指摘できなくても、1 文の叙述内容全体が先行文との結束を表すものは「は」が用いられやすい、という現象について考察を試みたい。

たとえば (46) (47) の差は先行文と当該文の叙述内容の関係の差であると言うことができる。

(46) 電車の中で

- a やくざ風の男が隣の若い女に因縁をつけている。 b 若い男が気持ちよさそうに居眠りをしている。

(47) 電車の中で

- a やくざ風の男が隣の若い女に因縁をつけている。 b 若い男は寝た振りをしている。

(46) は単に現象の描写の羅列であるが、(47) は a と b の間に因果関係を見て取ることができる。つまり、(47) では男は関わり合いになりたくないから、寝た振りをしているのである。このように、明示されていなくとも先行文との関連を表す文であれば、「は」が用いられる傾向にあるのである。それに対し、(46) の a と b は 2 つの事象を個別に描写したものである。このように、「が」使用文が用いられやすい叙述内容は先行文との関連に顧慮しないものである。

本節では VII の様な現象を扱った。

VII 「は」 使用文で表現されやすい叙述内容:

単一の成分では明示的に先行文との関連を表さないが、叙述内容全体をみることで先行文との関係を表すもの

「が」使用文で表現されやすい叙述内容:

先行文との関連を表さないもの

おわりに

本稿では「が」と「は」の使い分けについて、当該文が先行文脈と関連する叙述内容のものならば「は」が、関連しない叙述内容のものならば「が」が用いられる、ということを主張した。3. では、どのような形であっても、先行文脈との関連が現れていれば「は」が用いられやすいことを詳しく見た。

「が」と「は」の使い分けを1文の性質から説明する研究は「が」あるいは「は」に先行する名詞句の研究に比べ、未だ立ち後れていると言わざるをえない。今後の課題として、叙述内容間の関係のより詳細な分析、結束性マーカーとしての「は」の役割のついて研究を進めていきたい。

付 記

本稿は「国語学会平成10年度春季大会」(会場: 白百合女子大学)において発表したものに拠る。同大会の席上でご教示を頂いた方にお礼を申し上げます。

参 考 文 献

- 庵 功雄(1997) 「「が」と「は」の選択に関わる一要因——定情報名詞句のマーカーの選択要因との相関からの考察——」『国語学』188.
- 久野 暉(1973) 『日本文法研究』, 大修館書店.
- 柴谷方良(1989) 「日本語の語用論」講座日本語と日本語教育4 日本語の文法・文体(上), 明治書院.
- 仁田義雄(1991) 『日本語のモダリティと人称』, ひつじ書房.
- 野田尚史(1996) 『新日本語文法選書1「が」と「は」』, くろしお出版.
- 益岡隆志・田窪行則(1992) 『基礎日本語文法——改訂版——』, くろしお出版.
- Halliday & Hasan (1976) *Cohesion in English*, Longman (『テキストはどのように構成されるか』(1997) 安藤貞雄他訳, ひつじ書房).

文 例 出 典

- いちご同盟 三田誠広 集英社文庫(本文中「いちご」と略記).
- 月刊サギサワ 鷺沢萌 講談社文庫(本文中「サギ」と略記).
- とつネタ in '97 バンクファイブ編 青人社(本文中「とつ」と略記).
- 誤解を生む法則 小池真理子 中公文庫『贅肉』所収(本文中「誤解」と略記).